

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

「群馬県第二回巡講日誌」註解

著者	出野 尚紀
著者別名	idenonaki
雑誌名	井上円了センター年報
巻	26
ページ	289-319
発行年	2017
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00009553/

「群馬県第二回巡講日誌」註解

出野尚紀

ideno naoki

一 はじめに

筆者は『井上円了センター年報』第二十五号で井上円了（以下円了）の「群馬県第一回巡講日誌」の註解を試みた。本稿はそれに続く「群馬県第二回巡講日誌」の註解である。

円了は大正六年（一九一七）九月二十六日から十月三十一日までのひと月余りの間に群馬県の前橋市、高崎市と山田郡、新田郡、利根郡、群馬郡、勢多郡を巡回講演して回ったが、おそらくは東洋大学創立三十年祝賀会に出席するため十月三十一日に帰京した。第二回の巡講日誌は、帰京後十一月四日の川越講演への出発から十二月十五日の内田周平還暦祝いまでを範囲としている。

講演地は現在の地名で表し、当時の地名を註に付した。これは訪問の便を考えたからである。逆に講演場所は、原文では「小学校」との表記で学校名まで記されていないので、当時の学校名を調べて記し、現在の名称や変更は註とした。また、小学校に高等小学校が併設されていたかどうかまですべての学校を調べることができることはできなかった。尋常と高等は表記していない。人名の敬称は省略し、役職名を氏名の後ろに移動した。原文の誤記は判明した範囲で修正し、原文の表記を註に記している。漢詩や和歌などがちりばめられ、円了の感興が分かる

けれども分量の都合で削除し、制作したことのみを記した。円了は、訪れた各郡で方言を採取しているが、それにはカギ括弧を補った。そして、慣習の記録を留め二度の巡講の結果として、群馬県民にたいする感想を記しているが、それらは、民俗資料として重要なものと考え活かしている。原文に区切りはないが、そのままでは長いので、十日間を目途に区切るなど、適宜分割した。

原文では、詩文や漢文・仏典からの語句引用、漢文に基づく表現技巧など円了の知的レベルの高さを示す語が多く味わいがあるが、それらを平易な語に変えたため、巡講日誌が本来持っていたリズムを失わせてしまっていることをご了承ください。

二 十一月川越講演

十一月三日、午後五時に池袋駅を発車して、東上本線で埼玉県川越市(1)に至り、今福旅館(2)に宿泊した。

四日、大雨。午前は、曹洞宗の長喜院(3)で揮毫をし、午後は、町役場内の議事堂(4)で講話を行った。聴衆が極めて少なかった。開会の発起人は山本国隆長喜院住職だった。私と故郷を同じくする友である松下定雄川越郵便局長も助力してくれた。演説後、山屋料理店で晚餐を食して、その夜、高木兼寛男爵(5)と一緒に帰京した。

三 東洋大学祝賀会

十一月五日、東洋大学に宮内省から恩賜の沙汰あった。

十一日、快晴。東洋大学において創立三十年の祝賀会が行われた。当日にそれを言祝ぐ漢詩と川柳を作った。

四 十一月中旬

十一月十六日。未明の暗がりのなか家を出て、六時半に随行の静恵循⁽⁶⁾とともに上野駅を発車した。九時に群馬県の群馬県高崎市の高崎駅に着いた。そこから高崎中学校⁽⁷⁾に至り、校友会のために講演を行った⁽⁸⁾。伊藤允美校長⁽⁹⁾は私と同じ新潟県の出身であった。午後一時、飯塚停留所から電車に乗った⁽¹⁰⁾。はるかに浅間山が雪をかぶって一面に白くなっているのが望めた。渋川からは馬車鉄道に乗り換え⁽¹¹⁾、走ること道のり約二十・七キロメートル⁽¹²⁾で、日が暮れてから吾妻郡中之条町に着いた。稲刈りはすでにおわっており、桑の葉はことごとく落ちていて、田畑のいろどりがなくなっていると感じた。ただし途中、岩井堂⁽¹³⁾は素晴らしい光景で、岩の隙間に紅葉した楓がところどころに生えているのは美しいものであった。この日は、風が冷たく寒気が衣服を貫くほどであった。宿所の鍋屋旅館⁽¹⁴⁾は昔、十返舎一九が宿泊したところだそうだ。

十七日 快晴。霜が地に満ちていて、庭が白くなっている様子は雪が薄く積もったようである。午前、浄土宗清見寺⁽¹⁵⁾で教育家の追弔会があった。そこで一席の談話をした。その寺は吾妻川の溪谷上の腰部にあり、市街から坂を下りて西から境内に入る。その眺望は興津の清見寺に似ているけれども、前面に見える光景には、海と山の違いがある。住職は長田台麟である。午後、中之条小学校⁽¹⁶⁾に移動して講演をした。主催は教育会で、発起人は藤崎正義吾妻郡長、関新平視学、佐藤喜与平書記、小代伝三郎校長であった。こちらには県立農業学校がある。中之条の名物は梅羊羹、栗羊羹、椎茸羊羹であると聞いた。私の郷里である来迎寺村⁽¹⁷⁾から小野塚熊吉という名前の人が、ここに移住している。

十八日(日曜) 快晴。朝の気温は一度ほどで、たまった水が氷っていた。厳寒のときと同じである。馬車で行程約九・一キロメートル⁽¹⁸⁾、吾妻川に沿ってさかのぼり吾妻郡東吾妻町岩島⁽¹⁹⁾に至る。途中、岩櫃山の素晴ら

しい山塊がある。車上で漢詩を吟じた。世間一般に群馬県の中から風というものが、吾妻郡にはその風が吹かないとのことである⁽²⁰⁾。この日は、藤崎吾妻郡長と同乗した。岩島の会場は公会館⁽²¹⁾である。演説、芝居、集会、すべてここを使用することである。赤塗りの新築建物である。発起人は小池甚一郎岩島村長、日野豊三郎助役、山池富次郎校長、山口留吉校長、岩島銀行の日野太七、古川了真応永寺住職で、みな大いに力を尽くしてくれた。この日の夜は、応永寺⁽²²⁾に泊った。郡内で最も大きな寺院で、山門は立派なものである⁽²³⁾。古川住職は哲学館出身⁽²⁴⁾とのことである。

十九日 晴れ。馬車に乗って行くこと約十五キロメートルで、吾妻郡長野原町に至る。途中、吾妻川の峡谷四キロメートルの間は関東耶馬溪と呼ばれる⁽²⁵⁾。奇巖が縦立横臥し、その石の間に松や楓が生えている。紅葉は七分ほど落下しているが、なお三分は残っている。適宜馬車を停めて、何とはなしに愛でてみた。とくに吾妻川の激流が両崖わずかに一間の幅しかない狭路を落下してほとばしるところは、大いに趣がある。また、弁天橋の中央に岩石屹立して、自然に橋杭となっているものも素晴らしい。その川上に円山あり。形状は、豊後玖珠郡の岩扇山に似て、岩壁が中空にかかるのもまた一つの景勝である⁽²⁶⁾。会場は長野原小学校⁽²⁷⁾、発起人は宮崎亀三郎長野原町長⁽²⁸⁾、佐藤政吉助役⁽²⁹⁾、川村新次郎校長⁽³⁰⁾、休憩所は大津屋である。これより草津まで道のり十一・一キロメートル⁽³¹⁾、その道は馬車を通すはずだ。草津から更に山の間に入ること直線で五・二キロメートルのところ⁽³²⁾に、入山という名称の寒村がある。利根郡の藤原⁽³³⁾と比べられる僻地である。常に杓子を作って集落外に売りに出している。よって「恐れ入山メンパの杓子」という文句が、世間に伝わっている。メンパとはご飯をいれる曲げ物のことである。今その村は、六合村の中に入っている。六合はクニと読む。演説の後、馬車を馳せて川下に行くこと二里、川原湯温泉の敬業館⁽³⁴⁾に宿泊した。客室が六十以上あって二百人の宿泊客が収容できる。

浴室も数カ所ある。これに次いで山木屋、山木屋、養寿館³⁵があり、どれも内湯を有している。この夕方に関東の耶馬溪を謳う漢詩を吟じた。

吾妻郡の四大温泉と呼ばれているのは草津、四万、沢渡、川原湯であるが、始めの三温泉は数年前に入浴を試みた。ただ、まだ温泉を知らないのは川原湯のみであったが、今夜で、全部入湯し卒業することができた。それを記念して和歌を詠んだ。

その夜、寒さが凜として衾を貫き、一晚中熟睡することができなかった。そもそもこの峡谷を関東耶馬溪と称することはおもしろくない。その景色は、決して耶馬溪の従となるものではない、当然独立した名称で世間に広めるべきである。私が考えるに、川原は仙源と音が同じくできるので、これから、仙源溪と改めたいものである。

二十日 快晴。川原湯を出発し、馬車で下流に向かうこと道のり十四キロメートル³⁶で東吾妻町原町³⁷に至り、原町小学校³⁸で講演した。吾妻郡の他の講演場所はすべて郡教育会の主催であるが、会場だけは吾妻郡内各宗寺院が組織した樹徳会の主催である。目下、農家は稲コキと麦マキに着手して繁忙期であるので、聴衆が実に少ない。発起人は星野亮石副会長、深井法庵、長田某、河原田寛澄、坪井全勇、天野靈真で、遠藤清造校長、田村直次郎原町長に助力していただいた。郡役所から佐藤書記が各所に案内をしてくれた。東洋大学出身の荒井雪堂³⁹が高山村尻高から来訪してくれた。

吾妻郡巡講中に見聞したこと的一端を記すと、その特有の方言に、「アチャ」「ガラ」「モーゾウ」「ペーガンス」がある。「アチャ」は「ソレナラ」の意味、「それならお見せなさい」というべきことを「アチャオミセナサイ」という。「ガラ」は過失を表し、「誤って壊した」を「ガラコワシタ」という。「モーゾウ」は早急さを表し、「早

速出掛けた」を「モーゾウデカケタ」という。「ベীগランス」は語尾に添える言葉である。また、語尾に「ムシ」を付けることは利根郡と同じである。「タビタビ」を「トロピヨウ」といい、「ジネン」を「オノガター」という。郡内の宗教は曹洞宗を第一とし、浄土宗がこれに次ぐ。一般に住民の信仰心は薄く、葬式の外には僧侶を招くこともなく、死後の七日にも三十五日にも寺へ参ることなく、盆正月にも寺を訪うもの本当にまれである。檀家の宅には柵のなかに位牌を置くのみで、仏像を安置しない。みなが寺や仏は、縁起の悪いものとして忌み嫌う。これに反して神道は縁起がよいと聞いて、神葬祭に改める者も少なくない。ある村落には天理教が盛んなところがあるという。あるいはまた老人においては、途中で寺の住職に出会うことすら不快に感じるところがある。その意図するところは、住職が過去帳の中に記入して死を祈るのを恐れることによるという。以上は伝聞のままを記したものである。

五 十一月下旬

十一月二十一日 快晴。原町から人力車に乗ること約二キロメートル⁽⁴⁰⁾、四万川を橋で渡って中之条に到着し、午前八時発の馬車鉄道に乘車し、渋川で電車に乗り換え、飯塚で汽車に乗り換えて十二時過ぎに安中市⁽⁴¹⁾に到着した。会場は安中小学校⁽⁴²⁾は校舎が大きく勇ましい⁽⁴³⁾。開会の主催は碓氷郡教育会で、田中正三碓氷郡長、佐藤錠太郎視学、中林広次書記、小井戸方三郎校長、吉田源次郎校長が発起人である。当地は新島襄⁽⁴⁴⁾の出身地なので、キリスト教を信じる団体があるという⁽⁴⁵⁾。午後から上州名物のからっ風が吹いた。宿所は安中館⁽⁴⁶⁾である。旧知の柏木順映が来訪してくれた。私が安中で講演するのは四回目だと思う。

二十二日 晴れ。人力車で行くこと道のり四・一キロメートル⁽⁴⁷⁾で安中市原市⁽⁴⁸⁾に着いた。中間に県立蚕糸

学校⁴⁹がある。蚕糸学校の山中良治校長は東京大学予備門の同窓であるが、三十五、六年ぶりの再会であった。道の両側に老杉が並木となっているのは、旧中山道だからである。午後、原市小学校⁵⁰で講演をした。発起人は柳沢弁造原市小学校長、小林岳二後閑小学校長、上原信太郎磯部小学校長である。この時期は郡内一般に稲コキ、麦マキの最中で繁忙を極めるところ。山林の紅葉は満を持してまだ落ちず、幾分か旅中の目を楽しませるのに十分である。この夜は、真下嘉蔵宅⁵¹に泊めてもらった。哲学館の出身者である当町の金田有円⁵²満福寺住職が来訪してくれた。昨日、人力者に乗っているとき漢詩を作った。

夕方に東京から五日の恩賜に奉答する目的で東洋大学と京北中学と一緒に学生生徒一千五百名が提灯行列を行い、二重橋前に整列して、陛下の万歳を三唱したとの報せを受けた。

二十三日 晴れ。人力車で行くこと五・八キロメートル⁵³で安中市松井田町松井田⁵⁴に着いた。途中、日章旗が軒に翻るのを見て祭日であることを知った。会場は松井田小学校⁵⁵、主催は碓氷郡教育会、発起人は須藤和四郎校長、休憩所は坪井旅館である。村山初太郎松井田町長はこれより二十年前、当地で開会したときの主催者であったことを記憶している。本日は田中郡長も出席された。夕方には、東京上野公園の梅川亭で大学予備門当時の仲間が夜話会を開くというのを聞いたので、歌を電報で送った。演説後、特別に佐藤視学の厚意によって汽車で磯部に移り、磯部館⁵⁶に宿泊した。同館の前身三景楼⁵⁷は、私が三十二年前、二カ月間滞在したところである。懐旧の漢詩を一つ作った。磯部館は大きくはないけれども、客室の設備と接待の方法がともに良いという評判である。その他に温泉旅館として鳳来館、林屋、山城軒などがある。夜に入って碓氷川の水の音が枕頭に聞こえ、客の眠気を催させるようで非常な幽趣を感じた。

碓氷郡の方言を聞くところでは、前橋、高崎と大差はない。二、三例示すると、男児を「ガキ」、下層社会では

女兒を「アマ」、氷柱を「アメンボー」、ヒキガエルを「ベットー、オヒキベットー」、イタドリを「トツカンボー」、ホトトギスの鳴き声を「オトガノドヲツッキッタ」という。子供が物の数を数えるときに二個ずつを取って、「ヤナギノカゲカラオバケガダヨ」という。これで三十まで数える。もし四十を数えるときは、これに「マタダタヨ」を加えるという。

二十四日 快晴。厳しい霜が地に降りていて、紅葉が日にあぶられ、紅天地白世界を現わしている。これに加えて、浅間山が白粉を装うように雲の衣を帯びながら紺碧の空に屹立する様子は、明け方の眺望として極めて壮快である。福田啓作北甘楽郡視学が私の行程の先導となり、平らな岡の上、桑林の間を通過して富岡市富岡⁽⁵⁸⁾に着いた。人力車で行くこと九・五キロメートル⁽⁵⁹⁾、途中、洗粉の原料を採出するところがあるのを見た。山底に穴を穿ち、粘土を採出し、乾燥させて製粉するといことだ。本日の会場は富岡小学校⁽⁶⁰⁾で、聴衆のなかには富岡中学校⁽⁶¹⁾、実科女学校⁽⁶²⁾の生徒も加わっていた。主催は北甘楽郡教育会と学事会で、丹後斉治北甘楽郡長、福岡視学、古沢小三郎富岡町長⁽⁶³⁾、田中美名人校長⁽⁶⁴⁾、そして矢島太八、中山雄、加藤延次郎の三氏の発起である。宿泊場所の大和屋旅館は主人の姓を櫛島という。これをヌデシマと読む。この夕食は郡長、町長等との会食であった。古沢町長は齢七十七、県下町村長中でもっとも高齢であるが、饗饌としてよく飲みよく語る。その元氣は青年を圧倒する。この日は旧十月十日に当たり、北甘楽郡の慣例としてこれを「トウカン夜」と呼び、藁を束ね、これを縄で固く纏めて棒のようにし、この藁棒で地面を打つ。その言葉に「トウカンヤヨイモノダ、朝蕎切り、昼団子、夕餅食って遊ブンベ」と叫ぶ。これは翌年の豊作を祝する意味があるそうだ。その日は必ず麦と団子と餅を食すという。つぎに、十月の恵比寿講には焼き餅を食すと聞く。その他、北甘楽郡の風俗として、十二月八日に目かごを逆さまに吊るし、これを軒前に立てることがある。その日には子が親を招いて饗応をする。

また、二月八日も目かごを吊るす。このときは親の方で子供を招くという。以上の慣例は隣の郡にもあるようだ。

二十五日（日曜） 温かく晴れ。午前は原製糸場⁶⁵を一覧した。工女は約千人、そのうち四割は越後、六割は群馬県やその他の県であると聞いた。工場は明治三年の起工、五年の開業で、政府が創立したものである。わが国で蒸気力を工場に応用したのはここを嚆矢とする。実に明治文明史上に特筆すべき工場である。工場の一棟には幅七間、長さ八十六間、工女五百二十人を収容する建物がある⁶⁶。政府の事業とはいえ、五十年前の営みとしては驚くばかりである。大久保佐一支配人⁶⁷が場内を案内してくれた。即興で一首を記して同氏に差し上げた。その建築はすべて木柱、瓦壁で、和洋折衷になっているのはおもしろいものである。ここより人力車で行くこと四・四キロメートル⁶⁸、鐺川の橋を渡り、丘陵を上下して甘楽郡甘楽町小幡⁶⁹に入った。この村はもと小幡藩の城下であったという⁷⁰。茂木旅館で昼食すると、女中が団扇をもつて傍らに座り、食事の間たえず蠅を払う。冬の蠅払いは珍しいものである。会場の小幡小学校⁷¹では当日物産品評会があった。演説の発起人は木暮兵三郎校長⁷²、高橋一郎小幡村長⁷³、遠藤蒼次助役、柳沢房蔵書記などである。この夜は田中歌吉郵便局長⁷⁴の家に宿泊した。

二十六日 穏やかな晴れ。春のようである。人力車で行くこと七・二キロメートル⁷⁵、釣り橋を渡って富岡市一ノ宮⁷⁶に移動した。途中、どこにも桑畑になっていないところはなかった。桑の葉はことごとく落ちていて、野の広々としている。農家はなお稲の始末、麦の耕作に忙しそうである。開会前に貫前神社⁷⁷を参拝した。町名のごとく群馬県第一位の神社である。門前の街路は丘の上にあつて、社殿は石階を降りた溪の間にある。門前から堂を見下ろすのは、佐渡の妙照寺とともに異例の作りである。社殿は小さいけれども、その彩色の美は日光東照宮を髣髴とさせる。門前の紅楓はわずかに残葉をとどめるだけだが、社殿の後ろに老杉が直立していてとて

も高い(78)大樹がある。俵藤太(79)が植えたという、幹の周囲は七メートル以上(80)におよび、境内はそのために森然としている。そこで感想の漢詩を一首読んだ。会場の一ノ宮小学校(81)は丘の下にある。主催は諸会連合で、発起人は今井梅次郎一ノ宮町長、高橋亀吉校長(82)、および山崎金次郎、田中寅之助、大里武志、石井泰蔵、田村茂十郎、佐藤繁松、矢野間徳次郎の七氏である。この地方に黨という一字姓がある。この夜は社前の亀嶋屋旅館(83)に宿泊した。

二十七日 晴かつ風。朝、一ノ宮駅を出発し、軽便鉄道(84)で谷間をさかのぼり下仁田町に到着した。その中間に「ナンジャイ」という地名があり、文字は南蛇井と書く。昔、幕府の代官が出張った際に村名を尋ねられたときに、その答えが聞き取れなかったので、代官が「ナンジャイ」と問い返したら、すぐにその語を取って地名としたとの伝説がある。下仁田から馬車に乗り換え、溪谷沿いの道を道なりにさかのぼること一〇・一キロメートル(85)、道路は整備されている。甘楽郡南牧村大日向(86)に着いて馬を止めた。ここはコンニャクが名産で、山はみなコンニャク畑、家はみなコンニャクイモを切って煎餅のようにし、串に刺し、軒前に掛け、乾燥させることに従事している。畑一反(87)あたりの収穫から百円以上(88)が得られ、桑や米よりも利益があがる。よって畑の売買額は一反六百円ないし八百円だそうだ。第一次世界大戦勃発以来、コンニャクの値段が大いに騰貴し、この地域では多くコンニャク成金が出たという評判である。とにかく下仁田より上流には稲田はまったくない。かつては、米を筒に入れて蓄えておき、人が亡くなりそうなとき枕頭でこれを振り、米の音を聞かせたということが、この山間部を形容した話である。また、街道から横道に入って五・二キロメートル(89)進んだ大塩沢に黄檗宗の名刹黒瀧山不動寺がある。その界限の奇勝をやはり関東耶馬溪という。会場は月形小学校(90)、主催者は同村と尾沢村の連合で、発起人は小金沢喜与治月形村長(91)、小須田健次郎月形小学校長(92)、安田百平尾沢村長(93)、飯塚

悦太郎尾沢小学校長⁹⁴、および有志の小金沢英夫で、みな大いに働いていた。聴衆の多くが婦人であるは異例のことである。宿所の千歳屋⁹⁵は下女を置かず、男性に給仕させるものまた珍しいことである。この夜、旅館で村長と校長が協力して直にコンニャクを製造するのを拝見したのもまた旅の一興である。ことわざに薬九層倍というが、コンニャク粉一合が三十倍になる、よってコンニャク三十倍と言わないといけない。畑から掘り出だしたときは、その形が大きな芋のようである。信州の人がこの地に来て、これを芋だと思い購入して家に帰り、そのまま煮て大失敗したという話がある。この日の途中に漢詩を作った。溪谷のところに水車でコンニャクを製粉する工場があり、まるで石灰を製造するように白煙が多く出ていた。月形村は長野県と境を接している。その県境に屋根形をした珍しい山がある。海拔は一二三メートル⁹⁶、妙義山の左後ろに位置して横座し、遠くから望むことができる。これを荒船山という、あるいは一名破風山ともいう。山の形は破風造りの屋形をしていることによる⁹⁷。その山の北側から流れ出す水を北牧川といい、南側の方を南牧川という。月形村は南牧川の溪頭にあり。谷間は狭く山が急で、家を建てるときに平地がないほどである。県境の山々はすでに雪をいただき、ときどき山から吹く風が雪片を吹き送ってくる。今秋以来、初めて雪を見る。夜に入って天がまったく晴れ、寒月が皎々としている。詩情が忽然と湧き出て一詩作った。

二十八日 晴れ。朝方の室内は寒く四度ほどで、水はみな凍っていた。馬車を巡らして甘楽郡下仁田町下仁田に移動し、午後下仁田小学校⁹⁸で講演した。校舎が新たに完成したところで、学習環境がよく整備されている。発起人は湯浅武之吉下仁田町長⁹⁹、北沢靖三郎校長¹⁰⁰、茂木松次郎学事会長、高井新之助学事会副会長で、佐藤量平上野鉄道会社長と松本伝蔵有志も助力された。下仁田については、「町が九の字で市がクサイ」という俚言あるのはおもしろいことだ。町の形が「く」の字なりで、市日は毎月九サイなるを意味する。実にその市街は本当

に山々が周圍に連なり、二つの山溪が合流するところにある。宿所は新杉原旅館である。福田視学は月形の山中まで案内の勞をとられた。本郡開会の特色は、神職会が教育会に加わって開催されたことにある。聞くところによると、郡内は飲酒が当然のことで、毎年、下仁田には一升会という飲酒会があるそうだ。

北甘楽郡の方言を聞くと、疲れたことを「セツチョウ」という。「アーツカレタ」を「アーセツチョウ」という。予想外のことを「アテツコトモナイ」といい、学校へ行くことを「学校セユク」という。また、言葉の間に「コ」を入れることがある。牛がくることを「牛がコークル」といい、菊が咲いたことを「菊がコーサイタ」というそうだ。また、郡内の地名四カ所を合わせると、ナス、ナンバ、イヤイヤ、カブリとなると聞いた。

二十九日 快晴。早朝に凍えるほど寒い中、軽便鉄道の下仁田駅を出発し、高崎駅で小山行駅に乗り換え、伊勢崎市^⑩に移動した。会場の伊勢崎北小学校^⑫は児童二千四百人の県下で一番大きな学校で、縦横八間十五間の大講堂があつても、児童全員を収容できないという。校地内に煉瓦造り、高さ十数メートル^⑬の時報を知らせる鐘楼がある。開会主催は町青年会で、会長の加藤末吉校長、副会長の戸谷清一郎助役、石川重一郎主事、石川太郎主事らが発起人である。夕方、料理店の銭屋、別名白水楼で、石川泰三町長、斎藤完二佐波郡視学、そして発起人諸氏とともに晚餐を食して、新井屋旅館に宿泊した。部屋は土蔵のなかにあった。夜は、満月が清く輝いて窓に映えるのを見て一首浮かんだ。なお、佐波郡長は岩本俊卿である。

三十日 晴れ。風が吹いて寒い。午前は群馬県立工業高校^⑭で校友会のために講話をした。校長は斎藤吉広である。そこから人力車で行くこと三・四キロメートル^⑮の伊勢崎市立三郷小学校^⑯で講演した。石田勝馬三郷村長、遠藤宗作校長らが発起人である。泊めてくれた平田源助は造酒家で詩画をよくする。その名酒「鳳泉」は毎年の品評会に一等に輝いている。五言絶句を一つ賦して主人に贈った。当家で伝聞するところでは、造酒に

従事するものの名称に種々あるそうで、第一はオヤカタ（杜氏）、そのつぎはカシラ（副杜氏）、そのつぎはニバン、そのつぎは麴屋、船頭（酒漉し掛り）、釜屋であると聞いた。

六 十二月上旬

十二月一日 穏やかな晴れ。人力車で行くこと六・六キロメートル⁽¹⁰⁾で、伊勢崎市西久保¹⁰⁸に着いた。途中、赤城山を仰いで見ると夜以来の寒風が雪を醸して、頂上に白雪を頂いていた。それを見て一首詠んだ。会場は赤堀小学校¹⁰⁹、主催者兼発起人は茂木元赤堀村長、千吉良啓八助役、町田善太郎収入役、萩野国松校長、堀祐源大光院¹¹⁰住職、および生形、町田両訓導らである。みな大いに働いてくれた。宿の大光院は学校の隣りである。村の旧家赤堀銘三郎の先祖の女子に、身を赤城山上の池に投げた方がいる。そのとき持っていた鏡の遺物だろうという評判の古鏡の破片が湖畔から出たという。私はこれを一見して、「欲知伝説昔、問鏡々無言、觀此蒼々色、默中如有言」と書を寄せた。赤堀村は中島徳蔵⁽¹¹⁾東洋大学教授の出身地である。村内にゴボウと言い牛房と書く珍しい姓がある。隣村の東村は国定忠治の出生地であるが、以前からその墓石を砕き取って粉末にし、中風の薬にするという迷信があると聞いた⁽¹¹²⁾。

二日（日曜） 温かく晴れ。人力車で五・八キロメートル⁽¹³⁾ほど、赤城山山頂の新雪を背中越し見ながら進み、伊勢崎市上植木本町¹¹⁴に着いた。大光寺を出て五〇〇メートルほど⁽¹⁵⁾行くと、田圃の間に数本の樹木がある。そのなかに薬師を彫った古石碑があり、これをキンマラ薬師⁽¹⁶⁾という。毎年一月十四日がその祭日で、近在から参拝者が雲集する。これに祈願すれば、腰部以下の病は必ず治癒すると伝えられている。後日治癒したら、木を男根の形にしたものを奉納すると聞いた。これはとても珍しい迷信である。この日の会場は殖蓮小学校⁽¹⁷⁾で、

休憩所は役場、發起人は川田勇作殖蓮村教育会長、高橋由太郎教育会副会長、古郡仲三郎殖蓮村長、櫛原忠次郎小学校長らである。村内に機業家が多く、郡内も稲コギ麦マギがまだまったく終わらず、農家がなお多忙であった。講演終了後、人力車で二・二キロメートル⁽¹¹⁸⁾乗って伊勢崎町の新井屋に宿泊した。

三日 穏やかな晴れ。明け方は霜が雪のようであった。人力車で行くこと六・一キロメートル⁽¹¹⁹⁾の伊勢崎市境下渕名⁽¹²⁰⁾に移動して講演した。会場は采女小学校⁽¹²¹⁾、主催者と發起人は岡崎清次郎村長、新井潤造助役、五代直四郎校長、吉田弁次郎訓導、三品宥勝妙真寺⁽¹²²⁾住職で、いずれも大きく働いてくれた。夜は妙真寺に宿泊した。真言宗豊山派である⁽¹²³⁾。この付近もやはり機業地だそうだった。

四日 温かく晴れ。人力車で行くこと三・七キロメートル⁽¹²⁴⁾で、伊勢崎市境下武士⁽¹²⁵⁾に入る。村落名の剛志は「タケシ」と読むところを「ゴウシ」と読む。ここもまた機業地である。よって田畑に婦女子を一人も見なかった。すなわち男が耕し、女が織るところなのである。この村だけでも、女性の機織賃が一年に二万円に達するそうだ。午後は剛志小学校⁽¹²⁶⁾で講演した。石原清助村長、長谷川卓郎校長、和佐田角太郎助役、天笠栄茂郎訓導、有志の高木平馬ほか七名が發起人で尽力してくれた。黄昏時、人力車にわずか一・六キロメートル⁽¹²⁷⁾乗って、伊勢崎市境⁽¹²⁸⁾の境小学校⁽¹²⁹⁾に移り、夜間講演会を開いた。校内の作法室は華族の御殿に似た設備を持ち、県下はもちろん関東の小学校においても、いまだかつて見たことのない作法室である。開会發起人は内田平次郎境町長、五十嵐留吉校長、野俣喜三郎警察署長、職員員の五代規信らである。この夜は恵比須講で多くが休業であったため、聴衆が比較的多かった。聞くところによると、商家は毎月一日、十五日、二十八日には恵比須大黒に灯明を掲げる風習だそうだった。そして、十月の恵比須講では特別に尾頭付きの魚を付けた御膳二人前をお供えし、そのお下がりには必ず主人夫婦が食すそうだった。維新の志士村上俊平⁽¹³⁰⁾はこの地の出身と聞いた。宿舎の中沢屋⁽¹³¹⁾は維新前か

らの旅館で、今なお茅葺きである。けれども玄関に宮殿下の御休憩所であることを掲示している。境町は前橋から離れること二三・五キロメートル⁽¹³²⁾、伊勢崎から離れること八・一キロメートル⁽¹³³⁾の地点である。

五日 穏やかな晴れ。明け方は寒さが実に厳しく、霜がまた多く生えている。人力車で行くこと四・九キロメートル⁽¹³⁴⁾、日光例幣使街道つまり高崎から日光に通じる旧道を通って伊勢崎市馬見塚町⁽¹³⁵⁾に移動した。半機半農の地である。休憩所に充てられた役場はちょうど新築されたところで、郡内一の役場と称している。会場は豊受小学校⁽¹³⁶⁾、発起人は松本完蔵豊受村長、多賀谷莊藏助役、神戸直一郎校長である。日がまさに暮れようとするときに人力車を走らすこと三・七キロメートル⁽¹³⁷⁾の伊勢崎市堀口町⁽¹³⁸⁾に入った。夕日が沈んでもなお空を染めるところで、正面に浅間山が煙を吐いて聳え立つのを望んだが壮観であった。夜になって、名和小学校⁽¹³⁹⁾で講演した。発起人は大和杢右衛門名和村長、大和栄八校長である。そして宿所は有志家小此木康昌邸である。この地の駐在下山作造巡査は哲学館に在学⁽¹⁴⁰⁾していたとのことである。この村には昔から首切り畑と名の付くところがある。これまでにその畑で首を切られたことが数回あったので、そこを耕す人なく、ずっと荒地になっていたが、耕地整理のために耕地に編入したと、迷信家が苦情を言っていると聞いた。斎藤視学は毎日各講演に出席されている。

六日 快晴。瓶の水が氷結し、石のようである。寒さは真冬と同じである。人力車で行くこと三・五キロメートル⁽¹⁴¹⁾、例幣使街道で利根川を渡って佐波郡玉村町飯倉⁽¹⁴²⁾に移動し、午後五料小学校⁽¹⁴³⁾で講演した。発起人は新井佐太郎芝根村長、今井得一助役、武井文之助校長、紅林孝潤僧侶らである。この夜は高見屋旅館に宿泊した。

七日 穏やかな晴れ。人力車で行くこと四・三キロメートル⁽¹⁴⁴⁾の玉村町下新田に着く。会場の玉村小学校⁽¹⁴⁵⁾

は堅牢な建物である。主催は各宗協会で、真山宥啓観照寺⁽¹⁴⁶⁾住職、西園実如西光寺⁽¹⁴⁷⁾住職、宇尾達道称念寺⁽¹⁴⁸⁾住職、真木孝良観音寺⁽¹⁴⁹⁾住職、福井栄覧神楽寺⁽¹⁵⁰⁾住職が発起人である。町田市之助町長⁽¹⁵¹⁾らが助力された。この町は昔遊廓をもって世に知られたが、今はまったく農業本位となっている。夜は真言宗豊山派観照寺に泊まった。私が毎回飯一杯というのを聞いて、大ドンブリに飯を盛り上げて出されたことはまたおかしかった。

八日 穏やかな晴れ。早朝、霜が降るなか玉村を出発し、下之宮⁽¹⁵²⁾の船橋を渡り、伊勢崎市連取町⁽¹⁵³⁾勝念寺に行った⁽¹⁵⁴⁾。途中、連取天神⁽¹⁵⁵⁾の社前を通過した。境内に有名な笠松があり、平たく広がって笠形をしている。その枝の広がりや周囲九〇メートル余⁽¹⁵⁶⁾である。午後は勝念寺で真宗青年会のために講話をした。青年会の会長は平田源助である。この寺は佐波郡唯一の真宗寺院で、桑林の間にポツンと立っている。規模は大きくないが新築したばかりで、堂内を一巡りすると進んだ構造であることが分かった。私の感想を一首詠った。夕方は宮郷小学校⁽¹⁵⁷⁾に移動して、更に村教育会のために講演をした。聴衆が講堂からあふれた。岩本佐波郡長も出席された。発起人は森村鍋太宮郷村長、栗原清作助役、篠木謙吉校長、職員の斎藤、伊原、森、宇野、根岸、須田、鈴木、常見の八人である。演説後、勝念寺に帰って泊まった。小学校からの距離は二・一キロメートル⁽¹⁵⁸⁾である。住職は多賀堂竜天である。また、宮郷村には哲学館出身の金田賢幢⁽¹⁵⁹⁾がいる。これらの諸氏が奔走し大いに働きかけた結果、群馬県中最多額の哲学堂維持金を拝受することになった。よって昼夜揮毫に忙殺され、夜半後まで筆を置くことができなかった。また、一郡全体を合計した哲学堂維持金の最多額を拝受したのも佐波郡である。これをここに大いに深謝する。

佐波郡の方言を聞くと、驚いたことを「タマゲタ」といい、大いに驚いたことを「ブッタマゲタ」という。大きいことを「デッケー」、すばらしく大きいことを「スデッケー」、嘘らしいことを「デンボー」という。

九日（日曜）。朝、勝念寺を出発して進むこと一・六キロメートル⁽¹⁶⁾の新伊勢崎駅から汽車に乗り館林市⁽¹⁶⁾に行く。会場の館林小学校⁽¹⁶⁾は児童数千八百人である。この日、郡教育会の総会があった。発起人は塙任邑楽郡長、高瀬泰作視学熊谷直方館林、町長、長沼亨校長、その他堀口、小林、清水、増毛、島田、杉本、矢島など全十五名で、みな大いに働いてくれた。こちらにも二十年前に来て講演したことがある。名物は麦落雁と干しうどんである。郡の名物を集めて俗謡を作った。塙郡長は身体が大柄であり、酒量もまた豪儀である。夜は美名伝旅館に宿泊した。それなりに大きな旅館だが、女中は一人のみである。機業が盛んなので、下女のなり手がないことが知れる。

十日 晴れ。人力車で行くこと三・九キロメートル⁽¹⁶⁾、館林市堀工町の茂林寺⁽¹⁶⁾を訪れた。茅葺きの禪寺であるが、門内は静寂で人氣がなく、再三呼んでようやく取り次ぎが出てきた。書院に入って分福茶釜を一見した。大体水一斗ぐらいが入る茶釜である。昔、この釜で茶を沸かし、千人の客に飲ませたが、どれほど汲んでも尽きることがなかったという。そのため妖怪の一物となる。これを分福と名づけるのは、この釜の茶を飲む人は福を分け与えられるという意味だろう。明治維新後に一度博覧会に出品したことがある。その際、伝説の真偽を試そうとして、湯を沸かして見物人に飲ませたところ、すぐに尽きたという。昔の妖怪であっても今日は妖怪ではない。そこで即興の一首賦した。これより更に人力車で三・七キロメートル⁽¹⁶⁾走って邑楽郡明和町⁽¹⁶⁾に至った。ここは郡内の模範村である。佐貫小学校⁽¹⁶⁾で講演した。発起人は田口真三郎佐貫村長、清水民治校長、渋川広一書記である。この夜、美名伝旅館に帰ると、高瀬視学の配慮で名物の鮎のアライを試食した。天下一品の美味である。その他ジュンサイもまた館林の名物だそうだ。

七 十二月中旬

十二月十一日 晴れ。館林の揮毫数が非常に多いため、午前は旅館に滞在して筆を奮い、昼食後ようやく塙郡長とともに軽便鉄道⁽¹⁶⁸⁾に乘車して邑楽郡大泉町⁽¹⁶⁹⁾に行った。客車の内部はハイカラであった。距離一・七キロメートル⁽¹⁷⁰⁾に三十分かかった。会場は小泉小学校⁽¹⁷¹⁾、発起人は金井椎吉小泉町長、長谷川定次郎助役、島田友蔵校長、教員の木村専一、森戸良作、服部儀次郎、川上茂太郎、森権次郎で、みな大いに働いてくれた。宿は中村屋旅館である。当町より新田郡太田町に六キロメートル⁽¹⁷²⁾、休泊村は二・六キロメートル⁽¹⁷³⁾に過ぎないそうだ。邑楽郡の地面は稲田と松林のみと言って過言ではない。松林だけで約六万アール⁽¹⁷⁴⁾ある。これはみな大谷休泊⁽¹⁷⁵⁾が事業を行ったところであると聞いた。彼を祭る神社が館林市街の外れ⁽¹⁷⁶⁾にある。

十二日 晴れ。人力車で行くこと五・七キロメートル⁽¹⁷⁷⁾の邑楽郡千代田町⁽¹⁷⁸⁾に入る。佐波郡と邑楽郡とはまったく平坦で、小丘すらなく、人力車で行くのにとっても快適である。まず真言宗豊山派光恩寺⁽¹⁷⁹⁾で休憩した。長柄行全住職は哲学館に在学⁽¹⁸⁰⁾したことがあるという。会場は永楽小学校⁽¹⁸¹⁾、主催は青年会、発起人かつ尽力者は塩田栄太郎永楽村長、増尾福三郎校長である。夜になってから灯をつけて光恩寺を出発し、行くこと五〇〇メートル⁽¹⁸²⁾のところから利根川を船で渡り、さらに田んぼ間の新道を走って熊谷駅に到着した。その距離九・一キロメートル⁽¹⁸³⁾、塩田村長も我々の一行を送ってここまで来た。途中、児童が走り出して、「お嫁サン来たれり」と言う。この辺りでは、嫁入りは必ず日暮れの後になるとのことだ。二十時半に乗車し、二十二時半に上野駅に着いた。以上で群馬県第二回の巡講を終わる。

邑楽郡の方言の二、三を挙げると、「馬鹿げた」を「モウゾウ」といい、嘘言を「デンボウ」、氷柱を「カナンボウ」、サヤエンドウを「ブドウ」または「サヤブドウ」、うどんを「メンコ」、利口を「オゾイ」、貴様を「イシ」

多いことを「エイラ」、激しいことを「ガショウキ」、爽快を「ソウケ」、少しあることを「チットンバー」、「化物が出る」を「ザトウがきたる」という。また、婦人の秘所を「オカマ」という。鹿児島島の「オハコ」と同じ言い換えである。珍しい姓については、邑楽郡に「二十里」と書く苗字があり、「チリヒジ」と読むは非常に珍しい。邑楽郡の俗謡にもおもしろいものがあった。

群馬県人の宗教信仰心の薄弱なことから、寺院が振るわないことは前にもすでに述べたが、その後で聞くところによると、寺院の収入は檀家一戸につき平均五十銭以下であるそうだ。その代わりに寺院は大抵多少の財産を持たないところはなく、糊口に窮する憂いはない。従って布教の努力をしないそうだ。檀家の仏壇は粗末のもので蜜柑箱ぐらいのものを用い、これをお勝手の棚の上に置く家が多い。そしてそのなかに位牌を置くだけだそう。また、寺院に入り仏像を拜むときに、拍手をする人が多いともいわれた。このように宗教の信仰心がないのと同じに迷信が実に多い。さきに挙げたもののほか、県内に広く忌避されるものは「サンリンボウ」である。その日に贈り物をするときは、これを贈った家は栄えるものの、これを受けとった家は滅亡すると信じられている。その字は三隣亡と書いて、一軒のみが栄えてほかの三隣家はみな亡ぶという意味に理解するのは笑える¹⁸⁴。また、六三の迷信がある。六三とは一種の占いで、自分の年齢より九を引き、残った数で吉凶を判断するものである。例えば残数が一か三ならば足に痛みを起こすとし、二か六ならば腰に痛みを起こすとし、五か七ならば肩、四か九ならば腹、六か三ならば全身に苦痛を起こすとし、六と三に当たる年を大凶とし、その年は必ず神社に参詣して、病気除けの祈禱を行うという。もう一つ聞き込んだ迷信を述べると、一般に切り火（石を打ちて出だす火）を縁起の悪いものとして厭忌する。その火がすぐに消えるからである。しかし、婚礼に際し嫁が家を出るとき、必ず切り火をする。これは、「帰るなかれ」という意味を示すという。その火を打つと同時に玄関へ塩をまくこと

が行われる。これは前橋方面でもっぱら行われる旧来慣習であるそう。碓氷郡では嫁が家を出ずるときに、切り火の代わりに箒で掃き出すことを慣例すると聞いた。これまた「帰るなかれ」という意味を示すという。これに反して普通の客が来たとき、客が去ったのを見てすぐに払うことを不吉とし忌むそう。また、前橋の旧士族の家では、正月三カ日の間は包丁を使うことを忌む。その意は切ることを嫌うことによる。よって大晦日の夜に、三日分の食べ物を全部切っておくそう。以上、伝聞のまま記しておく。

群馬県巡講は多野郡を除くほかの二市十郡を一周したので、ここに私の鄙見を開陳すると、県人は概して才があり智があり、旧習にとらわれず、情実による弊害に陥らず、快活にして進取の風がある。何事にもよく成功できる資格をもっている。そうではあるが、明治の新時代に、その割に成功した人物が出ていないのはどうしてかという、堅忍持久、自強不息の精神には欠けるところあるのではと疑わしい。いわゆるカラ風的にして、たちまち起こりたちまち休み、長く持続しない風があるように感じる。果たして忍耐力に不足があるとなると、これを補う方法を考えないといけない。私の見るところによると、教育方面では通俗講話を盛んに行い、知識を上げ、啓発する道を講じ、宗教方面ではその本分である教えを広げる行為を盛んにし、信念をもって機会に應じて知恵を導き開く方針を取る以外に良い方法はないと考える。今回三カ月に渡り、県内二市十郡を巡講し、各所において多大の厚意にもったいないことだと深謝するとともに、鄙見の一端を発表して高見を仰ぐものである。失礼があれば申し訳なく思う。

八 十二月川越講演

十二月十三日 晴れ。自宅で休養した。

十四日午後三時半、東上線池袋駅発の列車に乗り込み、五時に的場駅⁽¹⁸⁵⁾で下車し、人力車で行くこと四・九キロメートル⁽¹⁸⁶⁾の川越市笠幡⁽¹⁸⁷⁾の発智庄平⁽¹⁸⁸⁾邸に宿泊した。同氏は池袋から同乗してくれた。

十四日 晴れ。発智家は郡内の旧家で富豪である。大いに力を村治と教育に尽くしている。その屋敷を杉数十本が囲んでいる。名づけて養神園という。そのなかの書院を静観という。庭内に二十八勝があり、九曲水、摩天杉などと名がついている。ここを詠んだ詩を一つ献呈した。霞ヶ関村は田畑あり山林ありで、養蚕製糸ともに盛んである。また、サツマイモ、薪材も産出するそうだった。午後に講演を行った。会場は霞ヶ関小学校⁽¹⁸⁹⁾で校地内に大廟遥拝所があった。発起人は発智弘道会支部長、山畑武七幹事、幡宥順崇台講社社長延命寺住職、新井宥延執事である。村内有志のなかに珍しい姓がある。御菩薩池と書き、これを「ミゾロケ」と読む。また、この村の特色は年々村暦を作って各戸に配布することである。この暦には、正月は新暦一月を用い、お盆は七月二十四日より三日間をあてはめ、四月三日、四日を三月の節句とし、二月末を年中の勘定日とするなどの特色がある。演説後、的場駅で乗車し、夕方の七時に帰宅した。

十五日 晴れ。午前には東洋大学で内田周平教授還暦の祝宴に出席し、狂歌一首を詠み献呈した。

【註】

- (1) 当時は入間郡川越町。
- (2) 川越市に今福の地名があり、狭山市と接している。
- (3) 川越市幸町。各訪問地の住所は地図や該当施設のホームページで確認した。
- (4) 川越市元町。
- (5) 一八四九―一九二〇。薩摩出身。海軍軍医総監、慈恵医科大学創設者。『天則第四編第六号号外哲学館廿四年度報

告附本館規則』、『哲学館正科目講義録第七号外哲学館報告明治廿六年度』に名前がある。

(6) 愛知県出身。明治三六年七月哲学館教育学部第二科卒業。大正四年二月から三月に実施された岡山県巡講でも随行している。

(7) 現群馬県立高崎高等学校、当時は高崎市上和田町の現在高崎第一中学校が立地する場所にあったが、昭和六年の地震で校舎が損傷したため移転した。なお、初代校長は沢柳政太郎である。講演題目は「忠孝為本説」で、その概要は同校から大正六年十二月に発行された「群馬」二十九号に掲載されている。

(8) この講演を高崎中学校一年生であった第六十七代総理大臣福田赳夫が聞いたと思われる。

(9) 八代校長。高崎市史編さん委員会編（一九六九）『高崎市史第一巻』高崎市、二六八頁参照。

(10) 飯塚停留所は、当時飯塚駅であった現在の高崎駅北口にあった。高崎駅前から渋川市街までと前橋駅前から渋川市街まで路面電車が走っていた。その後、渋川から沼田、渋川から伊香保への路線が馬車鉄道から路面電車になり、合併した。渋川沼田間は上越南線の開通により廃止されたが、その他の路線は戦後まで東武鉄道のもとで営業された。

(11) 前記とは別に渋川から中之条まへ馬車鉄道が吾妻温泉軌道により明治四十三年より営業していた。線路は、三国街道で吾妻川を渡った後、中之条まで左岸を通っていた。大正九年に電化されたが、昭和八年に廃止された。中之条町誌編纂委員会編（一九七八）『中之条町誌第三巻』中之条町、一三九―一四一頁参照。

(12) 距離については、現在の地図で計測し、十メートル単位を四捨五入した。

(13) 渋川市村上の岩井堂観世音御堂のこと。岩窟を利用した懸け造りの堂、現在は足が朱色に塗られている。

(14) 中之条町大字中之条町にあったが、近年廃業した。筆者が二〇一六年に訪れたときに、建物は残っていたが、円了が宿泊したときの建物ではないと思われる。

(15) 中之条町大字中之条町。

(16) 中之条町誌編纂委員会編（一九七六）『中之条町誌第一巻』中之条町、一二六七―一二七一、同編（一九八三）『中之条町誌資料編』中之条町、一二三頁によると前年の大正五年は山室軍平の講話会が行われたという「群馬県庁文書」が採られており、円了以外の人物による招聘講演会が行われた。

(17) 明治二十二年（一九八九）の町村制発足のときに来迎寺村ができ、昭和三十年（一九五五）に合併して越路町、そして、平成十七年（二〇〇五）に長岡市となっている。

(18) 原文は「三里」、会場の岩島公民館の場所が特定できなかったため、宿泊した鍋屋旅館の前から現在の岩島公民館の場所までの間の距離とした。

(19) 当時は、吾妻郡岩島村。

(20) この日泊まる応永寺の現住職の話では、冬に一メートルの積雪があるとのことであった。

(21) 前註にも記したように、距離が三里とのことなので、東吾妻町岩下の岩島の公民館であると想定した。

(22) 東吾妻町岩下。

(23) この山門は楼門で、現在もそのまま建っている。

(24) 哲学館と東洋大学の在籍者名簿である郷白巖編(一九一九)『東洋大学一覽』東洋大学同窓会、に古川了真の名前は
ない。なお、同書一九九頁では古川蟠龍という曹洞宗僧侶が釜山で布教師を務めている。

(25) 志賀重昂が激賞したと、長野原町誌編纂委員会編(一九七六)『長野原町誌下巻』長野原町、三〇五頁にあり、三〇
六頁にも「吾妻溪谷は俗に閑東耶馬溪ともいわれ」とある。距離について原文では「約一里」となっている。

(26) この景色にはハッ場ダム建設により、失われる部分がある。現在、東吾妻町が発行しているガイドマップによると、
弁天橋は中央の橋脚の役割を果たした弁天島が残るが、桁の部分はないとのことである。

(27) 現在の長野原町立中央小学校、長野原町大津。距離が応永寺から四里とあることから推量した。当時、長野原の小
学校は一校のみであった。長野原町誌編纂委員会編(一九七六)『長野原町誌下巻』長野原町、九二頁によれば、大
正六年七月一八日に嘉納治五郎が講演したことが載っている。

(28) 『長野原町誌下巻』五五八頁に小伝がある。この時は十八代町長、後に二十二代町長も務めた。

(29) 『長野原町誌下巻』五七三頁に小伝がある。

(30) 原文は「新治郎」とするが、『長野原町誌下巻』九五頁の表記に従った。長野原町内の小学校を統合した長野原尋常
高等小学校長としては第三代になる。

(31) 原文は、「三里」、長野原町立中央小学校から草津湯畑間の道のりを計測した。

(32) 原文は「二、三里」、湯畑から入山までの道のりは一一キロメートル以上ある。

(33) 藤原ダムの完成により、藤原湖の湖底に沈んだ。

(34) 住所が川原湯温泉街のどこであったかは不明。『長野原町誌下巻』三〇二頁に紹介されている昭和初年の旅館には
「敬業館萩原順三」とあるが、昭和四十九年の川原湯温泉宿泊施設には名前がない。

(35) 前掲書三〇二頁において以上三軒は昭和初年と昭和四十九年の双方で営業している

(36) 原文は「四里」、宿泊した敬業館の場所が分らないので、移転前の川原湯温泉駅から原町小学校までの道のりで計測した。

(37) 当時は吾妻郡原町。

(38) 東吾妻町原町。

(39) 『東洋大学一覽』に該当すると思われる読み方に名前はない。

(40) 原文は「一里」となっているが、四キロメートルとすると中之条の街を通り抜けてしまう。

(41) 当時は碓氷郡安中町。

(42) 安中市安中。

(43) 安中市市史刊行委員会編(二〇〇〇)『安中市史第1巻近代現代資料編二(教育・文化・宗教)』安中市、四九頁によれば、校舎は明治四一年完成とのこと。

(44) 同志社大学創立者。安中藩士の家に生まれた。アメリカから帰国した後に住んだ旧宅が残る。実際の出生地は東京都千代田区神田錦町の現在学士院会館があるところで、円了が入学したとき、東京大学は神田錦町の同地にあった。

(45) 安中教会は明治十一年(一八七八)に新島襄が司式して創立された。安中教会ホームページ(<http://www8.wind.ne.jp/a-church>)二〇一七年十二月四日閲覧)参照。また、この時の牧師は与板の真宗本大谷派西光寺に生まれた柏木義円(一八六〇—一九三八)であった。この後に訪問客として記載される柏木順映との関係は不明である。日本

キリスト教歴史大事典編集委員会編(一九八八)『日本キリスト教歴史大事典』教文館、二九三頁参照。
安中を代表する旅館であると思われるが、場所などは不明である。

(46) 原文は「約一里」、安中小学校から原市小学校間の道のりを計測した。

(47) 当時は碓氷郡原市町。

(49) 現在の群馬県立安中総合学園高等学校、安中市安中。学校史については安中市市史刊行委員会編(二〇〇三)『安中市史第二巻通史編』安中市、七八二—七八四、八七六—八七七頁参照。

(50) 安中市原市。

(51) 佐野亨介(二〇一三)「真下家所蔵文書」の伝来について『日本古文書学会編『古文書研究七六』吉川弘文館という随筆がある。

- (52) 『東洋大学一覽』九五頁。
 (53) 原文は「二里半」、原市小学校から松井田小学校間の道のりを計測した。
 (54) 当時は碓氷郡松井田町。
 (55) 安中市松井田町松井田。
 (56) 安中市磯部。四軒の旅館が記されているが二〇一七年現在も営業中なのは、同館のみである。
 (57) 群馬県立文書館所有の磯部温泉資料によれば島崎藤村、田山花袋も宿泊している。
 (58) 当時は北甘楽郡富岡町。
 (59) 原文は「二里半」、磯部館から富岡小学校間の道のりを計測した。
 (60) 富岡市富岡。
 (61) 現在の県立富岡高校。
 (62) 現在の県立富岡東高校。
 (63) 十二代町長。富岡史編纂委員会編（一九七三）『富岡史全』名著普及会、六九六頁。
 (64) 十九代校長。富岡市史編さん委員会編（一九八九）『富岡市史近代・現代資料編（下）』富岡市、四二二―四二三頁参照。
 (65) 現富岡製糸場、富岡市富岡。円了が訪れたときは三井から原富太郎に譲渡された後の原富岡製糸所時代である。
 (66) 製糸場の工場棟を説明している。
 (67) 原文では「大石保佐一」、明治四十二年原合名会社に譲渡されたときに所長に就任した。『富岡史全』八〇一頁参照。
 (68) 原文は「一里」、富岡製糸場から小幡小学校間の道のりを計測した。
 (69) 当時は北甘楽郡小幡村。
 (70) 原文は「小藩の城下」となっているが、「幡」と「藩」を間違えたと思われる。
 (71) 甘楽町小幡。
 (72) 十一代校長。甘楽町史編さん委員会編（一九七九）『甘楽町誌』、甘楽町役場、一一七六頁参照。
 (73) 六代村長。『甘楽町史』七五八頁参照。
 (74) 小幡郵便局第二代局長。『甘楽町史』九六三頁参照。
 (75) 原文は「二里」、小幡小学校から貫前神社間の道のりを計測した。甘楽川を渡った橋は、「吊橋」と表記されているの

で、前日とは異なっていると考えられる。

当時は北甘楽郡一ノ宮町。

富岡市一ノ宮。

原文は「数十丈」となっている。

藤原秀郷のこと。甥の平貞盛らと平将門を討った。

原文は「二丈五尺余」となっている。

富岡市一ノ宮。

二十二代校長。『富岡市史近代・現代資料編（下）』四四〇—四四一頁参照。

廃業しているようで見つからなかった。貫前神社の付近の旅館は竹屋のみである。

現在の上信電鉄。軽便鉄道の上野鉄道で開業し、改軌した。

原文は「二里半」、下仁田駅から南牧中学校間の道のりを計測した。

当時は北甘楽郡月形村。

一反は、一辺が三〇メートルほどの三〇〇坪で約一〇アール。

換算額はいく種もあるが、例えば一円二〇〇〇円とすれば、二〇万円になる。

原文は「一里半」となっている。

現在の南牧村立南牧中学校、南牧村大日向。

十代村長。南牧村誌編さん委員会編（一九八二）『南牧村史』市川重雄、五一四頁参照。一二七〇—一二七一頁に小伝。

『南牧村史』一一〇二頁参照。

四代村長、『南牧村史』五一四頁参照。

『南牧村史』一〇七六頁参照。

二〇一六年現在は食堂であった。南牧村大日向。

原文は「四千五百尺」となっている。

妙義山同様にメサであるため、山頂部が平らで周囲が崖になっている。

下仁田町下仁田。

- (99) 九代町長。下仁田町史刊行会編（一九七二）『下仁田町誌』下仁田町、六〇〇—六〇一頁参照。
- (100) 七代校長。『下仁田町誌』五三九ページ参照。
- (101) 当時は佐波郡伊勢崎町。
- (102) 伊勢崎市曲輪町。
- (103) 原文は「六、七間」となっている。
- (104) 現在の伊勢崎工業高校、伊勢崎市中央町。
- (105) 原文は「約一里」、伊勢崎工業高校から三郷小学校間の道のりを計測した。
- (106) 伊勢崎市波志江町、当時は佐波郡三郷村立三郷尋常小学校。
- (107) 原文は「約一里半」、三郷小学校から赤堀小学校間の道のりを計測した。
- (108) 当時は佐波郡赤堀村。
- (109) 伊勢崎市西久保町。
- (110) 伊勢崎市西久保町。
- (111) 一八六四—一九四〇。教育者、倫理学者。東洋大学第六代、第七代学長。哲学館事件のときの学校側の当事者であった。
- (112) これは国定忠治が捕り手に捕まったとき中風で体の自由がきかなかったことにより、墓石や絵を持っていると忠治の霊が中風を除けさせると信じられた。
- (113) 原文は「一里半」、赤堀小学校から殖蓮小学校間の道のりを計測した。
- (114) 当時は佐波郡殖蓮村。
- (115) 原文は「数丁」、現在この場所はなくなっているようである。
- (116) 両袖口から男根が生えている薬師如来像が前橋市東大室町の最善寺には置かれているという。
- (117) 伊勢崎市上植木本町。
- (118) 原文は「一里弱」、新井屋の場所が分らないので、殖蓮小学校から伊勢崎駅北口間の道のりを計測した。
- (119) 原文は「一里半」、伊勢崎駅南口から境采女小学校間の道のりを計測した。
- (120) 当時は佐波郡采女村。
- (121) 現在の境采女小学校、伊勢崎市境下刈名。

(122) 伊勢崎市境下測名。

(123) 山号は大悲山。現在は新義真言宗に属しているようである。

(124) 原文は「一里半」、妙真寺から境剛志小学校間の道のりを計測した。

(125) 当時は佐波郡剛志村。

(126) 現在の境剛志小学校、伊勢崎市境下武士。

(127) 原文は「十五丁」、境剛志小学校から現在の境小学校間の道のりを計測した。

(128) 当時は佐波郡境町。

(129) 現在は伊勢崎市境に立地する。境小学校ホームページの沿革 (<http://www.isesaki-school.ed.jp/sakaishyo/gaiyou/gaiyou.htm> 二〇一七年十二月四日閲覧) によると、大正十四年に現在地へ移動しており、それまでの校地(神宮寺跡地)は判別できなかった。

(130) 一八三八―一八六四。禁門の変で平野國臣らとともに斬首された。下中邦彦編(一九三八、一九七九覆刻版)『日本人名大事典(新選大人名辞典)第六卷』平凡社、一七七頁参照。

(131) 現在、伊勢崎市境の例幣使街道沿いにある中澤カフェという古民家を利用した店舗になっていると思われる。

(132) 原文は「六里」、群馬県庁から境交差点間の道のりを計測した。

(133) 原文は「二里」、伊勢崎市本町の伊勢崎町役場があった場所から境交差点間の道のりを計測した。

(134) 原文は「一里」、中澤カフェから豊受小学校間の道のりを計測した。

(135) 当時は佐波郡豊受村。

(136) 伊勢崎市馬見塚。

(137) 原文では「一里」豊受小学校から名和小学校間の道のりを計測した。

(138) 当時は佐波郡名和村。

(139) 伊勢崎市堀口町。

(140) 『東洋大学一覽』一二三頁。

(141) 原文は「一里」、名和小学校から芝根小学校間の道のりを計測した。

(142) 当時は佐波郡芝根村

(143) 現在の芝根小学校、玉村町飯倉。

(144) 原文は「一里」、芝根小学校から玉村小学校間の道のりを計測した。

(145) 玉村町下新田。

(146) 玉村町上之手。

(147) 玉村町下新田。

(148) 玉村町下新田。

(149) 玉村町斎田。

(150) 玉村町下新田。

(151) 玉村町誌編纂委員会編（一九九五）『玉村町誌通史編下巻一』玉村町、三九三頁参照。

(152) 原文は「下の宮」。

(153) 当時は佐波郡宮郷村。

(154) 原文に距離が記されていないが、観照寺から勝念寺間を、連取天神を通るように、計測すると七・五キロメートルである。

(155) 伊勢崎市連取町。

(156) 原文は「五十間余」。

(157) 伊勢崎市田中島町。

(158) 原文では宮郷小学校から勝念寺間は「二十丁余」と記されている。

(159) 明治三十八年哲学部第一科卒業、伊勢崎市連取町宝幢院住職。『東洋大学一覽』三三、九五頁参照。

(160) 原文では「十丁」。

(161) 当時は邑楽郡館林町。

(162) 現在の館林市立第一小学校、館林市代官町。

(163) 原文は「約一里」、美名伝旅館の場所は分からないので、館林駅前から茂林寺間の距離を計測した。

(164) 当時は邑楽郡六郷村。

(165) 原文は「一里」、茂林寺から明和西小学校間の道のりを計測した。

(166) 当時は邑楽郡佐貫村。

(167) 現在は明和西小学校、明和町川俣。

(168)

現在の東武鉄道小泉線。

(169)

当時は邑楽郡小泉町。

(170)

館林駅から小泉町駅間の距離。

(171)

現在の大泉町立北小学校、大泉町城之内。

(172)

原文は「一里」、小泉町駅から太田市役所間の道のりを計測した。

(173)

原文は「十五丁」小泉町駅から太田市立休泊小学校間の道のりを計測した。

(174)

原文は「六百町歩」。

(175)

一五二―一五七八、山内上杉家臣の農政家。

(176)

大谷神社、所在地は館林市成島町。なお、墓は館林市北成島にあり、公園になっている。国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所ホームページ (<http://www.ktr.mlit.go.jp/tonejo/tonejo0030.html>) 二〇一七年十二月四日閲覧) 参照。

(177)

原文は「二里」、中村屋旅館の場所が分からないので、大泉町立北小学校から千代田町立西小学校間の道のりを計測した。

(178)

当時は邑楽郡永楽村。

(179)

千代田町赤岩。

(180)

原文は「永柄行全」、『東洋大学一覽』一五〇頁。

(181)

現在の千代田町立西小学校、千代田町舞木にあったが、昭和四十四年(一九六九)に現在の千代田町赤岩に移転した。千代田町ホームページ (<https://www.town.chiyoda.gunma.jp/soumu/kikaku/kikaku019.html>) 二〇一七年十二月四日閲覧) 参照。

(182)

原文では「数丁」、光恩寺から赤岩渡船場間の道のりを計測した。

(183)

原文では「三里」、赤岩渡船場から熊谷駅間の道のりを計測した。この時に円了らが利用した赤岩渡船は現在でも千代田町が運営している。千代田町ホームページ (<http://www.town.chiyoda.gunma.jp/kensetsu/doboku/doboku002.html>) 二〇一七年十二月四日閲覧) 参照。

(184)

「三隣亡」は現在でもカレンダーに記され、引っ越しを避けるなど忌み日になっている。

(185)

現在の東武東上本線霞ヶ関駅。

(186)

原文は「約一里」、発智は霞ヶ関カンツリー倶楽部の土地の地主だったので、霞ヶ関駅南口から霞ヶ関カンツリー倶楽部間の道のりを計測した。

(187)

当時は入間郡霞ヶ関村。

(188)

一八六四―一九三六、事業家、大土地所有者。大正六年当時霞ヶ関村村長であった。日外アソシエーツ編(二〇〇

四)『20世紀日本人名事典そゝわ』日外アソシエーツ、二二五〇ページ参照。霞ヶ関カンツリー倶楽部の土地を所有しており、霞ヶ関カンツリー倶楽部のホームページ(<https://www.kasunigasai.cc.or.jp>)二〇一七年十二月四日閲覧)に写真が出ている。

(189)

川越市役場。